

# MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

33

2009.11.30

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY NEWS

富士吉田あれこれ

## 富士登山ブーム



■おそらく、日本一高い所にある自動販売機（吉田口頂上）

夏季の登山シーズン、富士山は今も昔も変わらず、多くの登山者で賑わっています。古くは、明応9年(1500)、『勝山記』に「この年六月富士に道者参ること限り無し」とあり、500年以上も前から富士登山が人気であったことが伺えます。そして、ここ数年、富士山へ登山する人々が特に増えているようです。昨年は山梨・静岡あわせて八合目を通過した人が、過去最高ともいえる30万人を超えました。シーズン当初の天候不順で、出足が遅れた平成21年の登山期でも29万人を超えています。登山道のなかでも最も多くの登山者が利用する吉田口登山道では、約17万人で全体の6割近くを占めています。ちなみにスバルライン五合目を訪れた登山者を含む観光客は、もっと多く、約214万人にもものぼります。

これだけ多くの人々が押し寄せるのですから、マイカー規制がない期間で混雑する日は、五合目の駐車場はすぐに満車となり、路上には駐車場の空きを待つ車が延々と連なります。車の渋滞を乗り越え、次は人による渋滞です。特に山頂付近の登山道は狭く、一歩進んでは止

まるという状態が続き、立ち往生する事態にもなるようです。

何故、このように多くの人々が富士山を訪れるのでしょうか。富士山の頂上は、誰もがご存知のとおり日本で一番高い所です。それにも係わらず、本格的な装備や技術、体力の必要な他の名だたる山々と比較しても容易に登山できることが理由の一つにあげられます。また、日本一の高山にも関わらず、非常に利便性の高い山でもあります。古くから登山道沿いには幾つもの山小屋があり、登山期に開かれています。山小屋では休泊や食料、飲料水を容易に確保することができ、各小屋にはトイレも完備されているので、女性や子供も安心して登山することが出来ます。特に近年は、トイレや更衣室といった設備の充実から20～30代の女性が増えているといわれています。通常、登山といえは不自由が当たり前のイメージがありますが、このような点からみても富士登山は、日本一の高山でありながらとても便利な山となっていることが人気の理由の一つと考えられます。

しかしながら、便利で気軽なイメージがあるためか、軽装で

登山する人も多く、ケガ人も増えているのも事実です。体調不良や悪天候でも無理して登ったりして、ケガや事故を起こす傾向もみられます。

さて、この日本一の富士山、吉田口登山道の起点となる北口本宮富士浅間神社から登れば、スバルラインの有料道路料金がかりませんので、登るだけならお金は必要ありません。しかし、江戸時代は、「山役銭」といった入山料的な金銭を納めることが必要な山でした。江戸時代の登山案内『富士山道知留辺』には、「山役銭を出しミを潔斎山行の装をととのふ」とあります。山役銭の内訳は、時代によっても差がありますが、『甲斐国志』の記述では、不浄祓の料32文、二合目役行者賽銭20文、金剛杖14文(内8文は杖代)、中宮三社への御供料32文(内16文は休息料)、頂上薬師ヶ嶽20文(内14文大宮神主、6文は吉田師職)の合計118文(実際に納めるのは122文)の山役銭を山中4箇所それぞれで納めました。江戸時代の後半の記録では、山中4箇所徴収していた山役銭を御師が麓で一括して集め、登山切手を発行し、4ヶ所の役銭

場はそれを検める所となりました。また、それら以外にも梯子の使用料である梯子銭や登山道を修理する道造銭なども登山者から徴収することもありました。

現在、かつてないほどの人々が訪れる富士山。し尿やゴミの処理、環境保全など、訪れる人の数に比例して維持管理的な費用が必要となっています。地元では登山者等に対して任意の「協力金」を求める動きも出てきています。「協力金」と江戸時代の「山役銭」とは内容が異なりますが、今も昔も富士山のような特別な山には、お金が掛かるものなのでしょう。今後、世界遺産としての価値を認められれば、更に多くの人々が富士山を訪れるようになると考えられます。環境保全という観点からも人に対する何らかの対策が必要となってくるかもしれません。その意味では、これからの富士山は、利便性よりも環境保全等を優先していくことも考えられます。便利で多くの人に親んでもらえる反面、多くの弊害も抱えてしまうのも現実として受け止め、美しい富士山を後世まで伝えていきたいものです。

(布施 光敏)



◆レポート  
**富士山七合目如来寺太子堂の由来**  
 —寛政5年の書付から—

富士山七合目如来寺太子堂の由来 —寛政5年の書付から—

はじめに

昨年、当館では『富士の神仏』と題し、富士山内の仏像を展示する企画展を開催しました。

その際、市内新倉の如来寺が所蔵する聖徳太子騎馬像を展示しました。この像は、かつて富士山吉田口登山道の七合目（現八合目）の駒ヶ岳の太子堂（小室）に安置されていたものです。

聖徳太子騎馬像（以下太子像と略す）は雲を配した台座に、従者にたずなを取らせ、馬に乗る官人の姿で表されています。これは聖徳太子が27歳のときに富士山に登ったという伝説に基づいた姿です。銅造で、表面には金が施される豪華な造りです。台座に江戸大久保（東京都新宿区）の十三夜講というグ

ループが出資して造ったことが記されています。像は銅製で非常に重いのですが、各部で分解できるようになっており、登山期の夏には寺から富士山の小屋に運ばれ、秋にはまた降ろされていたと推測されます。しかし、この習慣は途絶えて久しく、現在はこの太子像が祀られていた太子堂の場所も不明となっています。

しかし、今年の夏、如来寺檀家の要望などから機運が高まった結果、太子像は久しぶりに富士山へ登りました。本稿ではその時の法要の様子を報告するとともに、古文書などから往時の太子堂（室）の位置や由来について推測するものです。



■聖徳太子騎馬像



■蓬莱館を目指す如来寺檀家

百数十余年ぶり太子像の富士登山

今年の登山期の8月3日、如来寺の太子像は1日だけ富士山八合目に安置されました。明治の廃仏毀釈以降とすると、およそ百数十余年ぶりと推定されます。

太子像の「登山」は如来寺と有志の檀家によって実施されました。参加者は約40人。如来寺に集って旅装を整え、明け方5時にバスで寺を出発しました。「先達」は御坂山岳会に所属する登山に長けた信徒の男性です。さらに、交代で荷物を運

ぶサポーター役が2人。太子像は箱に収められ、先達の背負子に付けられました。

バスは五合目に留まり、その先は徒歩となります。駐車場で参加者はそろいの法被に着替え、列を成して八合目蓬莱館を目指しました。住職の話では太子像の安置場所を蓬莱館に決めたのは、蓬莱館を経営する一族が如来寺の檀家であったことからお願いしたとのことでした。

途中、六合目の日の出館で

朝食を兼ねた休憩をとり、午前10時半頃には八合目蓬莱館に到着、蓬莱館の脇の平地に、富士山頂に向けて祭壇をしつらえ、聖徳太子像を安置しました。

太子の法要には「太子奉讃」という経典を唱和します。読経の間には、参加者は入れ替わりで焼香を行い、太子像へ手を合わせました。法要の後、蓬莱館で昼食をとり、祭壇を片付けて太子像を収納し下山しました。



■富士山に安置された太子像



■太子像を背負う先達



■太子奉讃



■八合目の法要



富士山七合目如来寺太子堂の由来 -寛政5年の書付から-

2つの太子堂（室）

今回、聖徳太子像は蓬萊館近くに仮安置されました。現在の蓬萊館や太子館は駒ヶ岳と呼ばれる岩盤上にあり、聖徳太子が降り立ったという伝説の場所にあたります。しかし、如来寺の太子堂がいずれに存在したのか定かではありません。

江戸時代の地誌・紀行文から当時の太子堂の様子を窺ってみます。文化11年(1814)成立の『甲斐国志』山川部第十六ノ上には、「駒ヶ岳ト云フ地アリ小屋アリ聖徳太子ノ像並ニ銅馬ヲ安ズ新倉村如来寺兼帯ス」とあり、駒ヶ岳に如来寺持ちの小屋があったことが記されます(註1)。嘉永元年(1848)成立の『富士山真景之図』(註2)には「駒ヶ岳と云う所に敏達天皇の御宇聖徳太子、甲斐黒駒(観音の化身と云)のりて登りしと云う所に銅馬を安置する小屋有り。」と記され、また、万延元年の『富士山道知留辺』(註3)

には「七合三勺」に「室一ヶ所駒ヶ嶽太兵衛 聖徳太子像 銅馬とともに室の内に安置す」と記されるとともに「七合五勺 室一所有 境屋徳兵衛」「亀岩」「烏帽子岩」のあとに「太子堂 新倉村如来寺持ち」の記述があります。

如来寺の古文書にも太子堂の記録があります。如来寺より発行された天明4年(1784)の『富士山駒嶽略縁起』(註4)によると、明和元年(1764)に小屋場を修復し、太子の尊像を安置したとされます。また、万延元年(1860)の『如来寺関係雑記』(註5)には「七合目駒岳 上町伝右エ門持 親兵衛 幸兵衛 別室銅黒駒有 駒銘江戸本飯田町万人講 □前後中午正徳四年五月廿三日 椎名伊与知島 八左衛門作」のあと、「太子室 小屋守坊屋常右エ門 如来寺兼帯 奉納富士山七合目駒岳 聖徳太子開帳 大原如来寺 寛政

四年子年六月六日 懸札 新倉如来寺」と記されます。

これらのうち幕末の万延元年成立の『富士山道知留辺』と『如来寺関係雑記』をみると、この時期には七合目の駒ヶ岳に聖徳太子像や太子に関わる銅馬を安置する小屋が2つ存在していたことがわかります。この内、『富士山道知留辺』の太子と銅馬を祀る「駒ヶ岳太兵衛」の室と、『如来寺関係雑記』記載の別室に正徳4年の銅馬を持つ上町伝右エ門の小屋は安置する物や記述の順番から同じ施設と言えそうです。同じ年に記された両書に太兵衛と伝右エ門では小屋主の名前が違いますが、後述するように、『如来寺関係雑記』には必ずしも最新の情報が記されているとは限らず、同一の小屋と推定しました。

この太兵衛あるいは伝右エ門の小屋は、如来寺兼帯の太子堂とは異なると考えられます。『富

士山道知留辺』では、この後の項目に如来寺の太子堂が別記されているからです。

そうすると、次項にてでくる『富士山道知留辺』の「太子堂 新倉村如来寺持ち」と『如来寺関係雑記』の「太子室 小屋守坊屋常右エ門」が同じ施設であり、今回登った太子像が安置された如来寺兼帯の太子堂であると考えられます。

『如来寺関係雑記』の「太子室 小屋守坊屋常右衛門」は、坊屋常右衛門という人物が小屋守、つまり管理人をしていると解釈されます。この「坊屋常右エ門」は「境屋」あるいは「界屋」の間違ひではないかと思われます。というのも、次のように、寛政5年(1793)に如来寺から小屋守「界屋常右エ門」にあてた下記の書付が残っているからです。

書付之事

一 富士山七合目史駒ヶ嶽小屋地式ヶ所之内巻ヶ所 其村与惣左衛門方より先代佐七殿冒取当寺え被致 奉納候故幸ひ小屋を致再建候処同村伊予殿ノ且家 江戸大久保同行中十三夜講を取結聖徳太子之尊像 を右小屋え奉納致申候 其節少々故障之儀有之 候処畢竟右場所其村之任来等有之全山定式 井公役参詣人継送り等旁之儀当寺二而は難取計 二付其元は且方之儀二候得は先年より仕来之通方事 引請仕来之商売致其村定式等是迄之通り二 可被致候則承々当寺之兼帯所二御座候依之 折々は全山談経可申候猶又小屋再建等有之 節は如前例伊予殿え鎮祭相頼従寺も全山 談経等可致候依之自今已後双方相持之積り二 到治定候得は末々脇え売渡等事は決て相成 不申事二御座候為後日一札如件

寛政五癸丑年五月

上吉田村 界屋常右衛門殿

一 年々全山之節は折々之通 五月廿八日二は被到仏参太子 御影并縁起等致持参可被弘候 猶又下山之節七月廿八日二は 太子尊前参銭井二哭加等 年々可被相納候

右小屋兼帯 如来寺 刑部伊予殿 主馬之助殿 長右衛門殿 丈左衛門殿 小左衛門殿

立会人 上吉田 新倉村 証人 同 証人 同 証人 同 証人 同

小屋守への書付

この『書付』(註6)の内容は以下の通りです。

富士山の七合目駒ヶ岳の小屋地の2カ所の内1カ所を村の与惣左衛門より先代の佐七が買い取って寺(如来寺)へ奉納した。幸い、小屋が再建されたところ、(刑部)伊予殿の檀家で江戸大久保同行の十三夜講を結成して聖徳太子の像をこの小屋へ奉納した。その節少々不具合があった。この場所は村のしきたりがあり、登山の定式ならびに公役・参詣人の継ぎ送りなどは如来寺には取計らいが難しい。そのため、檀家のことであるので前々より行っているように万事引き受けて商売し、村の定式などはこれまで通りとせよ。すなわち、永年にわたって如来寺の兼帯所とするものである。よって、折々は登山して読経する。また小屋を再建する際は、前例の通り刑部伊予殿に鎮祭を頼み、如来寺も登山して読経をする。こ

れによって今より以降は双方が協力して行っていくことを定めたので、末々どこかに売り渡すようなことは決してしないようにせよ。後日のため、書き付けておく。

毎年、登山の節には前の通り5月28日には寺に来て、太子像の御影と縁起などを(富士山へ)持っていき、それを広めるようにせよ。また、下山の節、7月28日には太子像への養銭や冥加は毎年(寺に)納めること。

ということで、如来寺や上吉田の御師刑部伊予から、管理人の界屋常右衛門にあてています。内容からすると書付より前には小屋を再建しているようです。前述の『富士山駒嶽略縁起』には明和元年(1764)に再建したとされますが、さらに寛政5年(1793)段階では再建された小屋に聖徳太子が安置されています。おそらくこの時の書付などを元に、68年後に『如来寺

雑記』がまとめられ、坊(界)屋常右衛門の名が記されたと考えられます。

そうすると、『富士山道知留辺』の「七合五勺 境屋徳兵衛」も「界屋」関係者と考えられるのではないのでしょうか。「境屋」は「界屋」の別表記と考えられます。太子堂の小屋守の界屋は、七合五勺に自分の家で営業する小屋を持っていたのでしょうか。そうすると太子堂はそこからそう遠くはないところにあったのではないのでしょうか。

この古文書は、現在蓬萊館を経営している一族に残されています。そうすると、蓬萊館が界屋常右衛門の室を継いで、現在に伝わった小屋守の室なのかもしれません。そうすると、蓬萊館の近くで行われた今回の法要の場所は、奇しくも、最もふさわしい場所だったのです。

太子像の造立年について

この書付には、太子堂の再建後に江戸大久保同行の十三夜講が太子像を奉納したことが記されています。そこから太子像は小屋の再建年とされる明和元年(1764)以降、寛政5年(1793)の間に造立されたと思われる。現存の太子像には年号は記されていませんが、江戸大久保十三夜講の銘が記されていることは『書付』と整合します。

前掲の『如来寺関係雑記』によれば、この大久保十三夜講はその後の文化8年(1811)にはさらに太子像の宝前に半鐘を奉納しています。現在、半鐘は見つかっておりませんが、講中の厚い信仰心をうかがわせます。(文:高橋晶子/撮影取材:篠原武)



■明治~大正時代の蓬萊館(絵葉書)

(註)  
※1 大日本地誌大系45『甲斐国志』第二巻(雄山閣1998年)を参照した  
※2 『富士吉田市史』史料編第5巻近世Ⅲ(富士吉田市1997年)史料No.29を参照した  
※3 『富士吉田市史』史料編第5巻近世Ⅲ(富士吉田市1997年)史料No.30を参照した  
※4 『富士吉田市史』史料編第5巻近世Ⅲ(富士吉田市1997年)史料No.84を参照した  
※5 『新倉の民俗』(富士吉田市1987年)P212~215を参照した  
※6 御殿場市の和光弘氏所蔵文書。当家は如来寺の檀家で、本稿への情報のご提供をうけた



## 上暮地新屋敷遺跡発掘調査概報 (中)

## 上暮地新屋敷遺跡発掘調査概報 (中)

### はじめに

MARUBI 31号で「上暮地新屋敷遺跡発掘調査概報(前)」の調査成果を紹介しました。今回は、前号に引き続きその後の調査内容を紹介します。調査の対象となった時代は、縄文時代前期中葉～中期前葉(約6,500年～5,500年前)です。



■ 調査風景

### 1. 桂溶岩と周辺環境

遺跡の側には、今から約10,000～9,000年前の縄文時代に流下した桂溶岩があります。この溶岩流は、都留市十日市場まで流れ下った大きな溶岩流でこの遺跡の成立に大きな影響を及ぼしています。桂溶岩流下後、御坂山系から流れ下る川筋が出口を失い、堰き止め湖が形成されたと考えられており、本遺跡周辺でも遺跡前面を流れる数見川の上流域や山を挟んで北側の日影地区周辺も湖になっていた可能性があります。このような環境において、本遺跡で出土した最も古い縄文土器が、約9,000～8,000年前であることから、この溶岩流下後に人々の居住が開始されたようです。

### 2. 富士山麓の自然環境 縄文時代

当時の富士山麓の自然環境は、どのようなものだったのでしょうか。その手がかりは、富士五湖の湖底にあります。これら湖底には、湖が形成されて以来連綿と堆積し続けてきた土が、下から上に向かって年代順に堆積しています。この一見何の変哲もない土ですが、その中には、周辺に生息していた植物の花粉が含まれており、その種類を判別することで、周辺の植生がどのように変遷していったかを知ることができます。そして、近年、山梨県環境科学研究(興水達司他、2003・興水達司他、2007)により、その詳細が明らかになりつつあります。

この分析結果のうち、河口湖のデータによると、約22,000年前の旧石器時代は、モミ属、トウヒ属、ツガ属など針葉樹が多く、広葉樹は少ないため、現在より寒冷な気候だったことが分かります。それが、縄文時代の早期～中期になると、コナラ亜属が多くなり、他にクマシデ属-アサダ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などの広葉樹が茂り、針葉樹は少ない比較的温暖な気候となります。この植生変化の中で、特に人間活動に大きな影響を与えたのが、コナラ亜属などに実る堅果類(ドングリなど)です。これら堅果類の利用を始めたことが縄文時代の大きな特徴なのですが、こうした

植物資源の利用は、動物資源では困難だった一定量の計画的な採取と長期にわたる貯蔵が可能とし、旧石器時代の遊動活動から縄文時代の定住活動へと社会変化を促すこととなります。

遺跡の海拔は約680mで、河口湖(830m)より低い本遺跡についても、広葉樹林に覆われていた河口湖周辺と同等かやや温暖な環境であったと考えられます。そのため、本遺跡の周辺は、コナラ類はもちろんのこと、クリ、クルミ、トチノキが多く生える堅果類の採取に適した環境であったと思われる、縄文人にとっても住みよい場所であったことでしょう。

### 3. 縄文時代前期中葉～中期前葉(約6,500年～5,500年前)

厚さ約10cmの火山灰層の下に、縄文時代前期～中期の土器を含む層(9～11層)がみられます。これらの土層から出土した土器の破片は、接合するものが多くあります。ただし、中期の土器は9・10層に多く、前期の土器は10、11層に多いことから、ある程度混在しながらも、各層が時代ごとに下から上へと形成されていったことが分かります。このように前期と中期の層が上下に分かれることは、県内では数少なく、本遺跡での土の堆積量が相対的に多かったことが分かります。その一因としては、やはり富士山から噴出した火山灰の堆積が考えられます。

各層で出土した土器型式(各地域、各時代ごとに命名された土器の名称)は、9～10層が中期の「五領ヶ台I式・II式」、10～11層が前期の「諸磯a式・b式・c式」、「十三菩提式」でした。

まず、9～10層では、住居跡などはありませんでしたが、焼土跡(焼けた土が集中する地点)が8箇所確認できました。それぞれの焼土は、50cm～230cmの範囲でごく薄く焼けた土が広がり、その中に5～10cmの焼土の純層を所々に含むものでした。このように濃い焼土が一様でなく斑状に分布することから、住居内の炉のように、毎日火を燃したのではなく、屋外で不定期に使用されていたと考えられます。この焼土については、9層より下の土層で出土量が急増する焼礫(被熱した石)との関連が推測できます。この焼礫は拳大～人頭大くらいの大きさで、9層よりも上の土層では、ほとんど見られま

せんが、9層以降、9層-867点、10層-2,812点、11層-2,375点と大量に出土しています。これらは、石蒸焼き調理で用いられたものと考えられます。石蒸焼き調理とは、熱した石の上に葉で包んだ肉やイモを置き、更にその上を葉や土で覆い蒸焼きにする調理法です。この調理法と焼土跡が関係するすれば、焼土跡は石を熱するために使用された可能性があります。また、焼土跡周辺からは、木の実などを加工する石皿が多数出土していることもここで調理が行われた傍証になるかもしれません。

次に、縄文時代前期の10～11層では、土器や石器が多く出土しましたが、住居跡は確認できませんでした。また、焼礫も多量に出土したのですが、集石遺構や焼土跡もありませんでした。

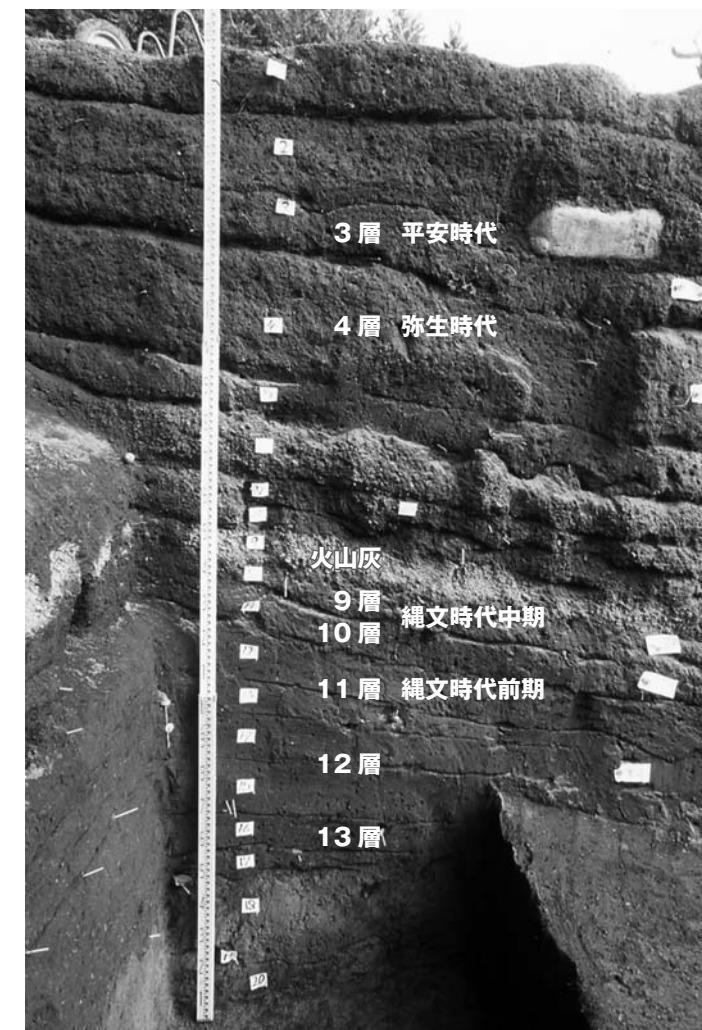
以上のような状況から、前期～中期においては、食料の調理等が行われる作業場的な場所と考えられ、居住地域は、前号でも指摘したように、一段低い場所となる東側に広がっていた可能性が高いようです。

#### ●参考文献

興水達司 他  
2003年「富士五湖周辺の自然環境変遷史に関する研究」  
『山梨県環境科学報告書8号』

興水達司 他  
2007年「富士五湖底ポーリングコアに記録された富士火山活動史」  
『富士火山』

野嶋洋子  
2007年「集石の民俗誌 焼石料理の特徴と先史的意義」  
『縄文時代の考古学5 なりわいー 食料生産の技術ー』



■ 遺跡の土層



■ 焼土跡(縄文時代中期)





## 博物館からのお知らせ

### ●新刊案内



『月江寺展  
 — 富士北麓禅の美術 —』  
 平成 21 年企画展図録  
 A 4 版 / 79 頁 / 370 g  
 価格：1,000 円

室町時代に開かれた月江寺は、江戸時代には富士北麓で最大規模の寺院とも称された古刹です。また、北口本宮富士浅間神社にかつては仁王門を所持し、富士道者の精進潔斎の地である下吉田の愛染には地藏堂を構え、さらに明治時代までは下

吉田の小室浅間神社の別当を勤めるなど、富士信仰とも深く関わりのある寺院です。

開山580年となる月江寺には数多くの絵画、彫刻作品があります。禅の美術の美しさと特色、寺と富士信仰の関わりを紹介しています。

### ●縄文王国山梨 バスツアー

平成21年10月18日(日)、縄文王国山梨の構成館を巡るバスツアーが催されました。当館においては、富士山麓に位置する富士吉田市の縄文時代遺跡の展示解説や生きたマスを石器でさばく体験学習を行いました。参加者の方々には、当時、石器の材料として使用されていた黒曜石の切れ味を直に体験してもらい、さばいたマスは焼き火で焼いておいしくいただきました。



### ●博物館職場体験

職場体験は、働くことの意義や素晴らしさ、自分の将来について考える良い機会として、実施しています。今年度、2学校4名の中学生が、博物館での職場体験を受けました。



## 富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

### ご案内

- 開館時間 / 午前9:30～午後5:00 (午後4:30迄入館可)
- 休館日 / 火曜日(祝日を除く)、  
 祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、年末年始
- 観覧料 / 大人 300 円(団体 240 円)  
 小中高生 150 円(団体 120 円)
- 交通案内 / ●中央自動車道河口湖 IC より車で10分  
 ●東富士五湖道路山中湖 IC より車で10分  
 ●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面  
 バス15分、サンパークふじ下車



### 博物館附属施設

#### 御師 旧外川家住宅のご案内

〒403-0005  
 山梨県富士吉田市上吉田3丁目14-8  
 TEL 0555-22-1101  
 観覧料 / 大人 100 円(団体 80 円)  
 小中高生 50 円(団体 40 円)  
 ※博物館・富士山レーダードーム館の  
 チケットで入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとされています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665

博物館ホームページ URL ● <http://www.fy-museum.jp> E-mail ● [hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp](mailto:hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp)

2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

発行 / 平成 21 年 11 月 30 日 印刷 / K2・ONE